

# 男性の Mate Selection における世代的差異

山 田 知 子

(家 政 科)

## 1. はじめに一課題背景—

戦後、従来の価値体系の崩壊が、「家族」に関わるさまざまな側面に与えた影響は非常に大きいものである。個人の自由と尊厳、男女の平等といった民主主義的価値観の浸透によって、配偶者選択 (Mate Selection) 過程においても自由な個人の主体的選択が重要視され、相互の愛情や信頼・誠実といった情緒的結合を基礎とした、Burgess の言うところの「友愛家族」の形成が結婚 (Marriage) 本来の目的として捉えられるようになった。

結婚そのものの本質性に対する価値観や理解のあり様が、社会的・文化的変動と共に大きく転換してきたという点を、アメリカの家族社会学者 Rice, F.P の著者『Marriage and Parenthood』を概説することで簡単に指摘しておきたい。Rice は「Traditional Marriage」と「New Marriage」とを比較し、その主要な相違点は結婚に対する目的であるとした。つまり「Traditional Marriage」においては、経済的保障、身体的保護、相手からの財とサービスの供給、子供の出産、さらには社会的地位と信頼の獲得を目的とするものであり、その意味では功利主義に基づいた結婚で目的達成のための手段であったのに対し、「New Marriage」においては愛情・親交といった情緒的欲求の充足が目的であり、結婚は手段なのではなく目的それ自体であり、より本質的なものであるとしている。よって前者では個人よりも家族集団の発展と維持が強調されるために自己埋没 (self-denial) が期待され、性的調和においては生殖を第一義的とし、性の快楽は夫のものであって妻にとっては義務行為であり、さらに夫婦が社会の期待に応じて生活し、それぞれの役割と義務を忠実に遂行することが結婚生活の成功に連がるものであるとしている。しかし後者では、個人の自由及び自己開発 (self-fulfillment)、自己実現 (self-actualization) を認め、個人の成長、個性の発達を追求し、自己高揚を求め、主体性を明らかにす

るものであり、夫婦間相互の性的満足を強調し、生殖は第二義的、従って結婚における成功の基準は、夫婦間の情緒的結合及び自己実現にあるとした。そして Mate Selection に対しても後者ではその自由性を強く指摘している (1979, Rice)。これを受けて「New Marriage」の特色を総合すると、「夫婦の一体化 (identity) を求めて、愛と信頼のためには他を全て犠牲にしてもよいと考える程結婚に期待をかけていることは事実であるが、しかしそのために個人の自由や成長や情緒的要求実現の機会を否定するものではなく、むしろ結婚は個人に何を与え得るかという点で重要視されている。すなわち個人の福祉と幸福こそ第一義的価値と考えられた。それゆえに、この結婚による家庭は家庭的統合を理想としながらも、集団としては明らかに構造的不安定性を内包しているのだ」 (1982, 星野) という現代家族の個人主義的特質に視点をおいた指摘もある。Rice の説明するこのような「結婚」の変化を、そのまま戦後日本がたどってきた家族変動に適應することは、もちろん社会的・文化的条件が異なるために容易にはできないが、愛を尊重するアメリカ的恋愛結婚への傾向を示しながらの発達過程であったことは明確である。

いずれにしても今日ほど「家族」の問題が深刻に問われている時代はない。父親不在も離婚も、あるいは家庭内離婚も家庭内暴力も、今日みられる家族病理現象の多くは、その根本に夫婦関係の在り方に対する問題を内包している。家族が質量的に縮小化した分だけ、夫婦家族 (Conjugal family) としての性格がより濃くなったと考えられ、夫婦関係がより直接的に子供に影響を与えてしまうわけである。その意味からも今後 Mate Selection のもつ意味は極めて大きく重要な問題になると言えよう。そこで本稿では、男性の Mate Selection のメカニズムを、3世代間で比較検討し、この分析を通して今日の「結婚」あるいは「家庭生活」を人々 (今回は男性に限る) はどのように捉え、何を志向しているのか、どのような点に世代的差

異がみられ、それをどう捉えるか考察することを目的としている。

## 2. 研究方法

上述の課題を実証分析により解明するために実態調査を実施した。

- (1)調査期間・方法……平成2年7～8月・留置法  
 (2)調査対象…表1の示すとおり Generation 1～3を設定

G 1…本学学生の友人男子大学生を中心に調査票を配布。分析対象89名。年齢層は18～29歳。平均年齢は21.2歳。

G 2…本学学生の父親を中心に調査票を配布。分析対象57名。年齢層は40～56歳。平均年齢は49.0歳。

G 3…広島市社会福祉協議会老人大学男性受講生に調査票を配布。分析対象74名。年齢層65～83歳。平均年齢は69.9歳。

全体で220名を分析対象とする。

(3)調査項目…本調査の問題意識から以下の3点を、その中心的な実証課題とし項目を設定した。①「結婚」の意味（重要性・当然性・安全性に関して）②Mate Selection の条件③志向する家庭像（従来の性別役割分業に対する意識や望ましい夫・妻像、望ましい夫婦関係）①～③を世代別に比較分析を行った。

- (4)集計…鳴門教育大学 spss<sup>x</sup> による。

表1 調査対象

世 代	人 数	平均年齢
Generation 1	89	21.2才
Generation 2	57	49.0才
Generation 3	74	69.9才
全 体	220	

## 3. 結果と考察

### (1) 「結婚」の意味

人は何のために結婚するのか。ここ数年、特に若い女性を中心に結婚願望が低くなってきているという声をきく。現に昭和47年から59年までの各年の総理府「婦人に関する世論調査」結果の変化を追ってみると、「女性が結婚することをどう思うか」という質問に対し、「1人立ちでできれば敢えて結婚しなくてもよい」という回答は、女性では13% (S47) → 24% (S59) へ、男性では7% (S47) → 15% (S59) とい

れも2倍近い伸びを示している。しかし結婚は、大部分の先進諸国から未開社会まで共通してみられる普遍的な社会制度の1つであり (Universality of marriage), やはり大部分の成人によってとられる生活の手段でもある (1987, 湯沢)。結婚によって家族が維持され、家族を基礎にして社会の存続と発展が保障されており、いわば結婚は社会成立の前提である (1979, 土田) とも言えよう。

ここではまず「結婚は人生の中で重要な事と思えますか」という質問をしたところ、図1のように「強く思う」「思う」を合計すると、いずれの世代でも8割以上を占めており、その意識の高さがうかがえる。しかしやはりG2, G3よりはG1で低く、しかも男子大学生であるこのG1においては「全く思わない」はみられないものの、「思わない」という回答がわずかに現われている点が注目されよう。人生の中で重要な事とは認識しながらも、「結婚することによって自分の人生が変わると思えますか」という質問に対しては図2の示すとおり、図1の肯定度よりは幾分低い結果となった。「思わない」と「全く思わない」を合計するとG1では2割弱となる。特にG2, G3とG1との差が大きく見られるのは「結婚することはあたりまえと思えますか」という質問においてである。G2, G3では8割近くが肯定しているのに対し、G1では5割にも満たない。「全く思わない」という回答すらわずかながら現われている。調査対象としてG2・G3は全員が有配偶者（結婚経験ありという意味であり、G3には死別者を含む）であり、しかもG2については、結婚適齢期を目前にした女子の父親であるという属性が影響しているものとも考えられるが、若い世代を中心に、結婚が人間にとって絶対的に必要不可欠なものであるべきという意識が次第に希薄になりつつある傾向がみられよう。「あなたにとって結婚とは何か」という質問で自由回答を求めたところ、G2・G3では「子孫繁栄のため」「人生の中の重要な出来事」「常識」「世に対する責任を果たすため」「社会的に一人前になること」などという回答がみられた。G1では「これまでの生活への区切りと協力者を得て始まる新しい生き方の進路を示すものひとつ」や「人生の大きな峠」という、結婚が人生の節目であるという意識がみられるものの他に、「自由がなくなる。人生の墓場みたいなもの」「ただどうしようもなく、なんとなくゆき」「青春のおわり」「ギャンブル」といった回答もみられる。

次に結婚の安定性についてみてみる。結婚を1つの社会制度とみた Westermarck によるその定義は「1

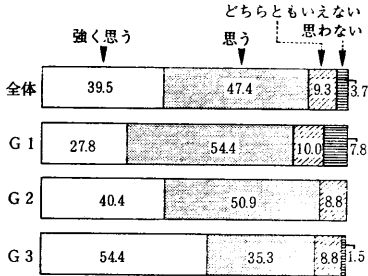


図1 「結婚は人生の中で重要な事  
と  
思  
い  
ま  
す  
か」 .025 < p < .05

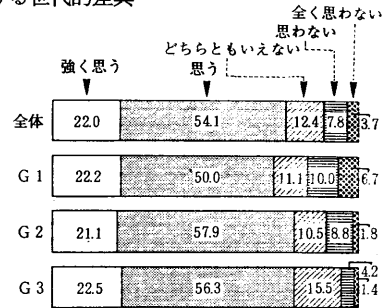


図2 「結婚することによって自分の人生  
(性格・考え方・価値観を含む)が  
変わ  
る  
と  
思  
い  
ま  
す  
か」 NS

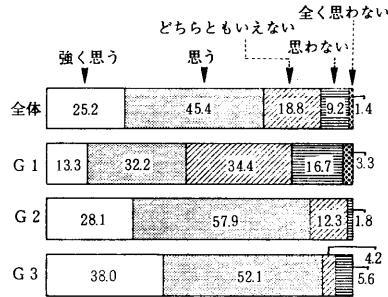


図3 「結婚することはあたりまえと  
思  
い  
ま  
す  
か」 p < .005

人ないし数人の男子と、1人ないし数人の婦人からなり、慣習ないし法により是認され、その結合の両当事者やその結合から生まれた子供について一定の権利義務を包含している関係」である。ここには社会的に承認された男女の性関係と、その結合関係に一定の権利義務がともなうことの2つの要素が含まれている(1980, 望月)。結婚の機能は、「家族」が実に多面的、包括的に機能を遂行しているのと同様に、またそれと重複するものも多くみられるが、より結婚に結びついたものとして、精神的・社会的・経済的安定性に対する認識をここでは取りあげている。精神的安定・社会的安定については、図4、図5の示すとおりいずれの世代でも6割以上が肯定している。しかしG2・G3とG1との開きは明らかに指摘できよう。特に社会的安定については、G2・G3がほぼ9割を占めているのに対し、G1では6割強であり「思わない」とする回答も1割強みられる。経済的安定については、図6の示すとおりG3に比べG1・G2において「思わない」「全く思わない」と回答する割合が高く、特にG1では3割弱を占め、肯定する割合よりも高い結果となっている。この5段階尺度の回答に点数を与え(強く思う…5点、～全く思わない…1点)、平均点をとり、世代間及び3つの安定性の比較を表わしたものが図7である。まずどの安定性をみても得点はG3 >

G2 > G1となっており、世代間では老年層の肯定度が最も高い。G1では精神的安定、G2・G3では社会的安定の肯定得点が最も高い。またいずれの世代においても、精神的安定・社会的安定に比較し、経済的安定は低得点となった。精神的安定は、個人に対する機能としてだけではなく、性的欲求の充足が社会統制上、性的安定に機能していると同様に、全体社会に対しても社会の安定、社会的活動への参加意欲の再生産に機能しており、また社会的安定は、結婚することによって社会的に一人前の人間であると認められるといった社会的承認と、社会的地位付与の機能としての意味をもち、特に男性にとっては強く認識されているとみてよい。それに対し、経済的安定は妻子を経済的に支えていかなければならない男性よりはむしろ、女性にとって強く認識される側面と考えられる。

(2) Mate Selection の条件

従来わが国の結婚の特質は、当事者本人の選択意思によらない結婚が支配的であったことにあるとされている。すなわち戦前までは「家」が社会の重要な基礎的単位とされてきたため、結婚は「家」の維持存続と発展のための手段として捉えられてきた。「家」本位の時代における結婚は、嫁入り婚であれ養子婿取婚であれ、すべて手段婚として社会から強く規定され(1979, 土田)、従ってそこでの Mate Selection の主体は親

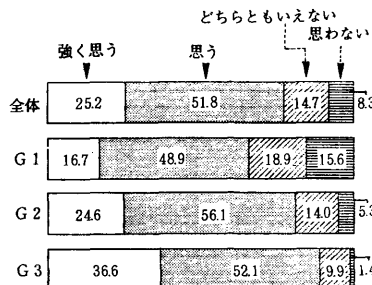


図4 「結婚することによって精神的に安定すると思いますか」 .01 < p < .025

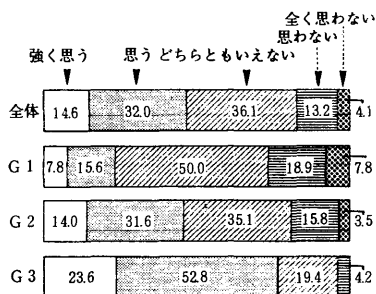


図6 「結婚することによって経済的に安定すると思いますか」 p < .005

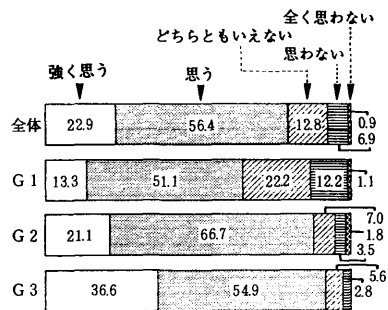


図5 「結婚することによって社会的に安定すると思いますか」 p < .005

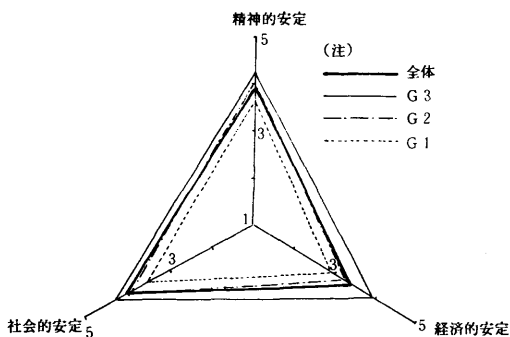


図7 結婚による安定性への認識 (平均点)

や親戚など当人以外の者による場合が多く、基準(条件)も家柄や財産などといった外形的な要素が強かったと言える。しかし今日、その様相は目的としての個人本位の結婚へと大きく変化し、本人の能力や人柄・価値観など個人的な資質が重視され、選択範囲も拡大されつつある。最近では、恋愛結婚が7割以上を占めるようになり、結婚には「愛情の一致」(Love Match)が最も大切な要因であるという認識が徹底されてきている(1987, 湯沢)。これは先に述べた Rice の指摘する「New Marriage」の特徴に通じるところである。

まず Mate Selection の主体性についてみてみると、図8の示すとおり、大勢として意思決定はあくまでも当人次第とする意見に近い。特にG1においては、その傾向が強く見られる。しかし結婚式のあり方については、周囲の意向をよく聞いてとする点もみられ、親の支援金で支えられている大多数の若者の結婚式のあり様がうかがえよう。現実には Mate Selection のプロセスのさまざまな場面において、今だ伝統的な形式が変形されながらも維持されているのかもしれない。結納という儀式もその1つの例であろう。

さて Mate Selection における自由性(自律性)によって、それはランダムに広範囲からなし得ると思われがちだが、実際には社会的・文化的に規制された枠

の中に限られる。その枠とは内婚(endogamy)―外婚(exogamy)の法則として示されている。つまり「内婚の原理とは社会学的に分類された集団の範囲内で配偶者を選択するように規定するもので、人には異民族や異教徒、あるいは文化的背景の異なるものは敬遠し、同じあるいは類似した文化的価値をもつものには親密さを感じる傾向があることに起因するとともに、社会的秩序の維持のために生まれた原理である。〈族内婚〉〈村内婚〉〈人種内婚〉〈階級内婚〉などさまざまな形態を示す。外婚の原理は内婚と反対で、自分とは異なった人、外部の人、あまり関係のない人の中から選択することが要求されているもので、その典型が〈近親相姦禁止の規則〉(incest taboo)である」(1980, 望月)。しかし現代化(価値観の変貌)が進むほど、この制約は緩和され選択範囲は拡大されるとみられよう。本調査からも、「相手の国籍・宗教・出身地

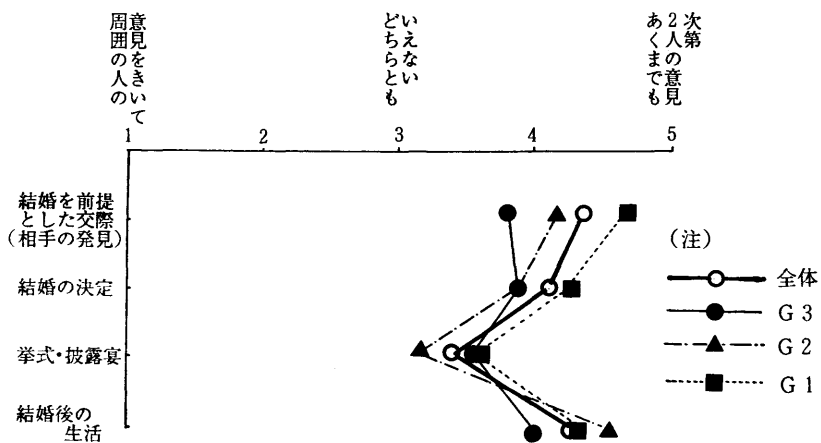


図8 Mate Selection の主体性

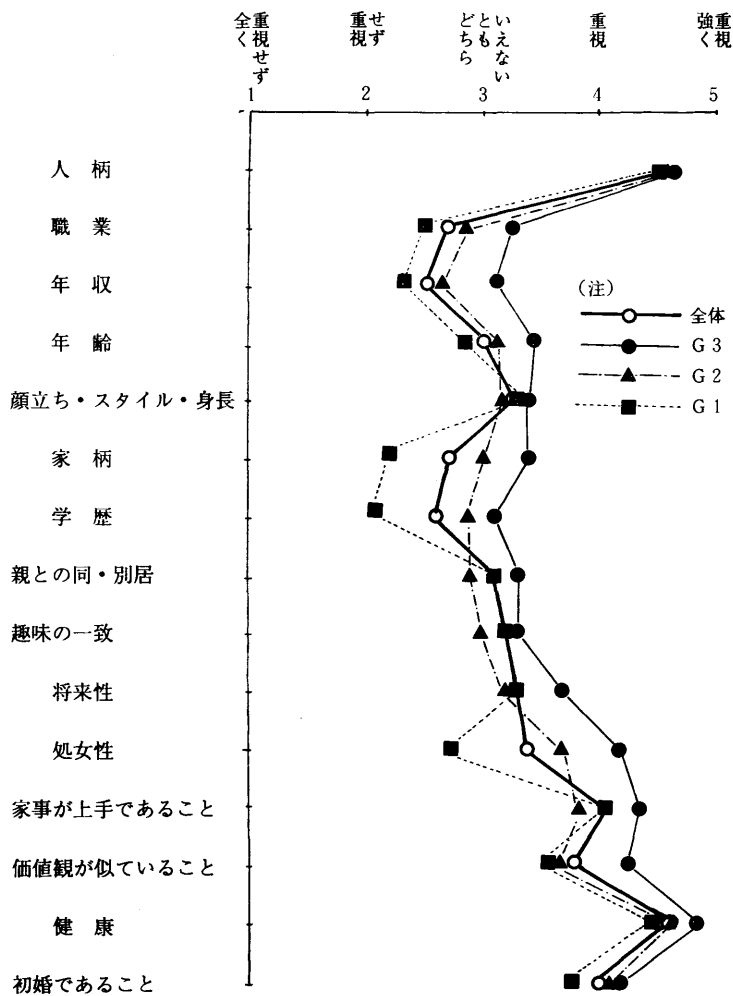


図9 Mate Selection の基準

が同じであることを望むか」という質問に対しては、国籍についての肯定度はG2・G3で8割、G1で6割弱と相対的に高い。宗教についての肯定度はG2・G3で5割、G1で1割強で、いずれの世代でも「どちらともいえない」という回答が最も多い。出身地に至っては、G3においてすら「望む」という回答は2割強でしかなく、G1では「全く望まない」という回答が4割を超えている。また階層内婚制について付記すると、男女間の通婚関係には若干ニュアンスの差異があるとされている。日本の伝統社会（特にムラ社会）においては「嫁は庭先から貰え」というように、いわゆる *Hypergamy* の原則が支配していたという。そこで年齢・学歴・階層について自分とのバランスをどれほど意識するか質問してみた。年齢についてはG2・G3で7割近くが「自分より下」、3割が「こだわらない」と回答しているのに対し、G1では「自分より下」と「こだわらない」がほぼ同率であった。学歴については、G1・G2で「こだわらない」が8割強であるのに対し、G3では5割強、「自分と同じ」が2割強、「自分より下」が2割弱であった。階層については、G3で「こだわらない」が6割、「自分と同じ」が3割、G2では「こだわらない」が8割弱、「自分と同じ」が2割、G3では「こだわらない」が8割強、「自分と同じ」が1割、また「自分より下」の階層からという回答はG3で1割強みられるがG2・G1では無しに等しい。総じて3項目いずれについても、「こだわらない」と回答した割合は若いG1で最も高く、「自分より下」と回答した割合ではG3で高かった。

また *Mate Selection* の心理的レベルの原理として、Winch らによって一般化された〈欲求相補説〉(theory of complementary needs)の言うところの“*Mate Selection*においては、各人は結婚相手とし得る適格者の範囲内で、最大の欲求充足を自分に提供してくれる見込みの最も多い人を探す”つまり“*Mate Selection*においては、それぞれの配偶者の欲求様式はもう一方の配偶者の欲求様式と同じであるよりはむしろ相補的である”などの研究もある(1980,望月)。

厚生省人口問題研究所やアルトマン研究所の調査結果によると、*Mate Selection* において重視する特性の上位には、人柄、健康、ものの考え方や生活態度などがあがっており、次第に手段的価値から表出的価値へと相対的移行がみられるという指摘がされている。図9をみても、人柄・健康は世代に差なく、極めて重視度の高い特性であることがわかる。さらに全ての特

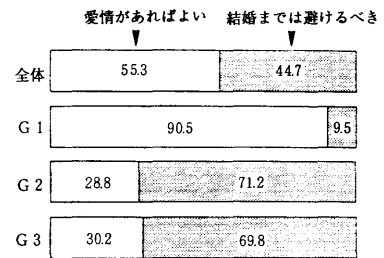


図10 婚前交渉に関する意識  $p < .005$

性の重視度はG3で最も高いことも重要な点である。G3では先にあげた2特性の他、家事が上手であることや処女性、初婚であること、価値観が似ていることなどが4点以上の領域にある。またこれらの特性の重視傾向はG2・G1においてもみられる。ただし処女性に関してはG1とG2・G3との間に大きな開きが見られる。世代間の差（特にG1とG2・G3）が顕著にみられるのが、処女性・家柄・学歴であり、G1ではそれらに職業・年収を加えた、いわば手段的（外形的）特性に関しては重視しない傾向にあることが明らかである。また顔立ち・スタイル・身長や趣味の一致・親との同別居などG2よりも高得点のものが幾つかみられる。婚前の性行為がどの程度まで許容されるかなどといった問題は、特に青少年の性意識や性行動についてのさまざまな先行調査結果からも明らかのように、愛情があれば認めると肯定する意見は大勢を占めている。図10をみても、G2・G3では「結婚までは避けるべき」とする考えが7割であるのに対し、G1では「愛情があればよい」と肯定する考えが9割を超えており、性規範は明らかに若い世代ほど希薄であることがわかる。

### (3) 志向する家庭像

*Mate Selection*の主体性や基準の問題は、根本的には当事者がどのような結婚生活を送り、家庭を構築していきたいかといったイデオロギーに大きく左右されるものである。そこでわが国の従来家庭像の主な特徴としてあげられ、一般的に肯定されていたと思われる点を14項目にまとめ、その肯定度を点数化(平均点)にして表わしたものが図11である。まず全体として、ほぼ3点から4点の肯定領域に、いずれの世代の得点が位置しており、また世代間で大きな差がみられない点に注目できよう。つまり男性の志向する家庭観には旧態依然の部分が多く残っていることになる。中でも「女性は料理ができなければならない」と「女性はタバコを吸うことを避けるべきである」については

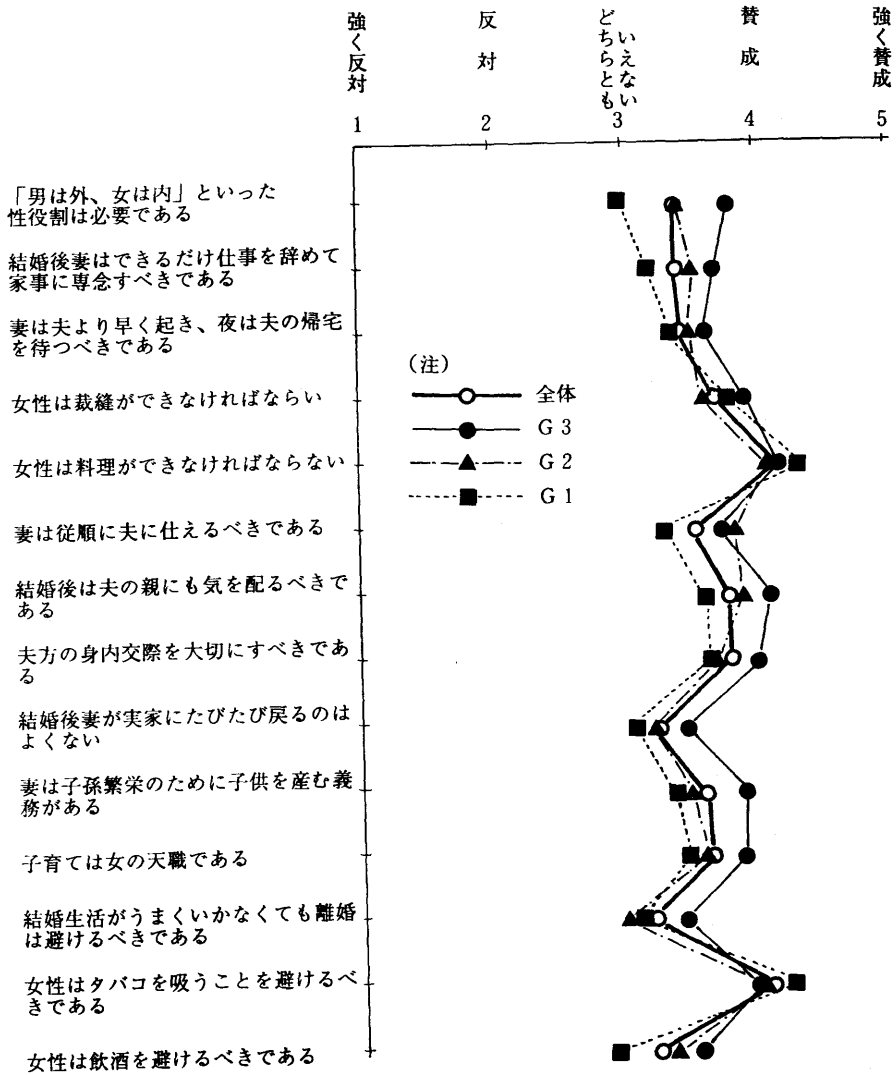


図11 志向する家庭像

表2 どのようなタイプの女性が妻として望ましいか

順位	全体	G 1	G 2	G 3
1	やさしい女性	●	●	●
2	かわいい女性	●	●	●
3	しっかりした女性	●	●	●
4	かっこいい女性	●	●	●
5	清楚な女性	●	●	●
6	知的な女性	●	●	●
7	個性的な女性	●	●	●
8	色気のある女性	●	●	●

表3 妻にとってどのような夫でありたいか

順位	全体	G 1	G 2	G 3
1	理解のある夫	●	●	●
2	やさしい夫	●	●	●
3	決断力のある夫	●	●	●
4	頼りがいのある夫	●	●	●
5	協調性のある夫	●	●	●
6	尊敬できる夫	●	●	●
7	威厳のある夫	●	●	●

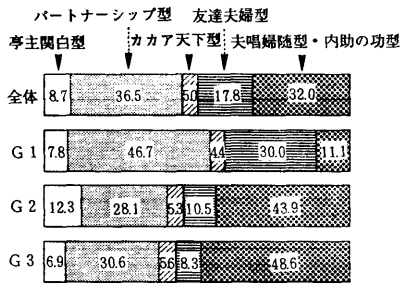


図12 志向する夫婦関係  $P < .005$

3世代ともに4点以上、しかもこの2項目に限りG1が最も高得点であった。(2)の基準において「家事が上手であること」の重視度が高いことを述べたが、この点に妻を housekeeper として捉えているような、男性の生活手段獲得としての結婚観を強く感じられる。「男は外、女は内といった性役割は必要である」や「結婚後、妻は出来るだけ仕事を辞めて家事に専念すべきである」の性別役割分業観や「妻は従順に夫に仕えるべきである」の男尊女卑観念に対する質問では、比較的世代間の開きが見られ、G1が最も低い結果となっている。今後女性の就業化がより定着し一般化し、共働き夫婦が増大してくると、必然的にこのような性別役割分業観に固執することは男性にとって困難になってくる。相互補償の立場で柔軟性をもって分担協力体制を確立していく必要がある。またG3では、ほぼ大部分の項目で最も得点が高いが、中でも例えば「結婚後は夫の親にも気が配るべきである」「夫方の身内交際を大切にすべきである」などの項目で高い。結婚が当事者本位のものへと移行する中で、結婚は男女の単なる個人的結合ではなく、夫妻それぞれの親族集団を姻族として結合することでもあるのだという点を強く経験的に認識しての結果であると思われる。また「妻は子孫繁栄のために子供を産む義務がある」や「子育ては女の天職である」などの項目でも肯定度は高い。

次に表2・表3・図12よりどのような夫婦像を志向しているのかみてみたい。望ましい妻のタイプとしてG1・G2については第1位「やさしい女性」第2位「かわいい女性」と上位が同じである。これらのタイプに共通するイメージは男性の庇護あるいは保護のもとに生きていくというものである。G3では第2位に、「かしこい女性」がランクされているが、この「かしこさ」は具体的には何をイメージしての結果か考察が難しい。家庭のヤリクリキリモリの腕前か？ またG2・G3の最下位は「個性的な女性」だった

が、G1では第6位と世代間に差がみられる。この結果に対し次に「妻にとってどのような夫でありたいか」という質問においては「頼りがいのある夫」、「理解のある夫」と続く。特に3世代いずれの最下位が「威厳のある夫」であったことは興味深い。また望ましい夫婦関係はG1では、お互いの人格を尊重し結婚生活に対して同等な立場で責任を果たしていこうとする「パートナーシップ型」が最も多く、5割弱を占め、次に「パートナーシップ型」よりさらにお互いの束縛をなくして生活していこうとする「友達夫婦型」が多い。これに対しG2・G3では「夫唱婦随・内助の功型」が最も多く5割弱を占める。夫婦関係の理念としては、夫婦を主従としてタテの関係で捉える型から、夫婦対等のヨコの関係で捉える方向に時代は確実に移行している。特に団塊の世代以降、結婚年齢差の縮小、恋愛結婚の増大に伴い、結婚観は明らかに変貌しつつある。しかし根本的には男性が女性に求める要素は「やさしさ」一言で言い表わすことができよう。そしてこの「やさしさ」志向性が、結果的には男性が快適な生活を送れるための家庭づくりと、見返りを求めない世話を女性に(妻に)求めることになり、既存の性別役割分業体制をあいかわらず固定させたままにさせていることに連がることを指摘したい。「あなたにとって結婚相手とは」という自由回答では「安らぎを与えてくれる人」「一緒にいて自然で疲れない人」「心のFollow をしてくれるような人」といった夫・妻個々による情緒的コミュニケーションを求めた意見がG1に多くみられ、G2・G3では「良妻賢母」「夫の収入以内できちんと生活する人」「仕事に打ち込めるよう家庭を守ってくれる人」「偕老同穴(夫婦仲良く生きては共に年をとり、死んでは一緒に葬られること)」「社会生活・家庭生活を2人で築く相手」「一身体」といった家族・家庭を基盤にしてその維持管理を含めた、共生者として相手を求めた意見が多くみられた。

#### 4. おわりに

本研究によって得られた幾つかの知見を列挙すると次のとおりである。

(1)まず結婚そのものを人生の中で重要なイベントとして認識している割合は、いずれの世代でも共通して極めて高く、また結婚という社会的に公認された形態をとることによって精神的・社会的・経済的安定性を獲得できるという意見にはほぼ肯定している。若いG1において精神的安定に対する肯定度が高かったのは、何よりも安らぎ・愛情・理解などの個人の情緒的欲求



が充足されなければならないというように、個人の福祉と幸福をここでの第一義的重要性と捉えていることの表われとみることができよう。その一方で結婚することはあたりまえであるという意識は  $G2 \cdot G3$  に比較し極めて低い。

(2) Mate Selection の主体性についてはいずれの世代でも最終的な意思決定はあくまでも当事者であるとする意見を肯定しており、その得点は  $G1$  で最も高い。重視する特性は先行調査などの結果同様、上位は人柄・健康で占められている。ほぼすべての特性について重視度は  $G3$  が最も高く、 $G1$  はそれだけ特性自体へのこだわりが希薄のようである。とりわけ処女性については世代間で大きな差がみられる。性規範からの解放度の違いがうかがえよう。全般的に Mate Selection の基準は手段の価値から表出的価値への重視傾向にあることが指摘でき、また制約緩和による選択範囲も拡大されつつあるといえよう。

(3) 男女平等の自由な主体的な選択意思に基づく恋愛至上主義傾向がみられるとはいえ、志向する家庭像・夫婦像を問うと、性別役割分業に基づく旧態依然の域を脱し得てはいないというこの事実は、まさにわが国の男性のもつ Cultural lag とでも言えようか。自己実現、自己開発を達成させる手段として社会に進出しはじめた女性の意識の高揚のスピードに男性が追いつけずにいる。男性の意識と態度の変革—「性差」観念の転換—が今後の課題となる。妻に望むタイプは、いずれの世代でも共通してやさしい、かわいいが上位を占めていたが、志向する夫婦関係では  $G2 \cdot G3$  が夫唱婦随型で  $G1$  はパートナーシップ型と世代的意識の開きを認めることができよう。

結婚に対する目的も、Mate Selection のメカニズムも社会状況の変化と密接に関連していることは明らかである。今後ますます結婚の本質は、その主体である個人にとってそれがどのような効用を与え得るかにあり、この点のみが重要視されてくる。「愛」は何ものにも勝って強しとは言え、また同時にいったん失望したり裏切られたりすると、これほど弱くもろいもの

はない。個人の情緒的欲求の充足のみによって支えられているとする、Rice の言うところの「New Marriage」では、その関係の永続性は夫婦間の統合調整に左右され、もし仮にその結婚の目的が何らかの理由で達成されない状態であったり、また結婚していること自体がかえって欲求不満や不幸の原因となったりしている場合には離婚が選択肢として容易に準備されているとする。アメリカにおける恋愛至上主義と離婚・再婚の増大はその最も良い例であろう。

いずれにしても結婚はまさにライフサイクルの出発点であり、同時に出生児数の減少と平均寿命の伸びによって生じた empty-nest 期(子供が巣立って夫婦2人だけで生活する時期)の大幅な伸びに反映して提唱された Blood, R.O の「夫婦の伴侶性 (Companionship)」機能をいかに遂行していくかを考えても、Mate Selection のもつ意義は大きい。自分の志向する結婚観・家庭観・人生観とはいったいどのようなものであるか、その適切な把握こそがまず各個人に与えられた今後の課題ではないだろうか。

## 文 献

- 1) 望月 嵩・森岡清美他『社会学講座3, 家族社会学』東京大学出版会 1980
- 2) 『家政学辞典』朝倉書店 1991
- 3) 土田英雄他『家族社会学入門』有斐閣新書 1979
- 4) 山根常男監修 本村 汎, 高橋重宏編『家族と福祉の未来』全国社会福祉協議会 1989
- 5) 望月 嵩・本村 汎編『現代家族の危機』有斐閣選書 1980
- 6) 湯沢雅彦『新しい家族学』光生館 1987
- 7) 星野 久「現代家族と婦人問題—個人主義の諸相と現状—」『衣生活』1982 pp. 14—20.
- 8) 山田知子「〈新しい結婚〉 vs 〈伝統的結婚〉— Rice, F.P 著 山田知子訳」『比治山女子短期大学家政学研究会誌 No.17』1989 pp. 7—14.

(受理 平成3年10月19日)

**Abstract**

## A Study on the Generation-gap of Mate Selection for Male

Tomoko YAMADA

(Department of Home Economics)

The purpose of this paper is to point out the difference of consciousness of mate selection for male comparing three generations.

After World War II, Japanese family has been changing greatly, and also the mechanism of marriage could not but have been influenced by change of the family-consciousness and the life style. That is, traditionally, people were married for utilitarian reasons, such as providing for physical needs services, and this type of marriage is a means to an end. But at present marriage is more intrinsic and its value is not as a means to an end but an end itself, and this end is love, companionship, self-actualization.

A few remarks by this investigation are as follows.

(1) The majority of males have consciousness that marriage is an important event of life, and it has economic, emotional, social security regardless of generation. But the consciousness that to get married is the right way are gradually breaking down in young generation.

(2) At present marriage is on the voluntary nature of the mate selection, and especially in young generation, there is a tendency to make much of the expressive characteristic (personality, concept of value, ..... ) in exchange for the instrumental characteristic (birth, academic career, ..... ). In addition, the sex norms are breaking down especially in young.

(3) The traditional sex-role norms are still alive even now. After all, males desire for female's tenderness, and for middle and old generation, a relation which the wife is willing to follow the husband's opinion, for young generation, a friendship relation.

With this change in the meaning of marriage, sexual and emotional relations between wives and husbands have become strong and important. Therefore, we should consider what are my most important personal values and what do I seek in life

(Received October 19, 1991)